

# ウムラの形

[ 日本語 ]

صفة العمرة

[ اللغة اليابانية ]

ムハンマド・ブン・イブラーヒム・アツ＝トゥワイジリー

محمد بن إبراهيم التويجري

翻訳者: サイード佐藤

ترجمة: سعيد ساتو

校閲者: ファーティマ佐藤

مراجعة: فاطمة ساتو

海外ダアワ啓発援助オフィス組織 (リヤド市ラブワ地区)

المكتب التعاوني للدعوة وتوعية الجاليات بالربوة بمدينة الرياض

1429 – 2008

islamhouse.com

## ⑦ウムラの形

- ウムラに臨む者がミーカート<sup>1</sup>を通過する場合、そこでイフラーーム<sup>2</sup>に入ります。もしミーカートの内側からウムラに臨むのであれば現在いる場所からイフラーームに入りますが、マッカの住民であれば一旦タンイーム<sup>3</sup>などの聖域外に出てからイフラーームに入ります。昼夜に関わらずマッカに入る際には高い場所からそうすることが望ましく、出る際には可能ならば低い場所から出るようにします。また聖域内に入った時点で、タルビヤ<sup>4</sup>を唱えるのをやめます。
- ハラーーム・モスクに到着したら、ウドゥー<sup>5</sup>のある状態のままそこに入ります。そして黒い石のある柱から始めて、カアバ神殿をタワーフ<sup>6</sup>します。その際、神殿が自分の左側になるようにします。
- タワーフする前に、上半身に纏っている布の真ん中の部分を右上の脇下に入れ、布の両端を左肩上で留める形にすること - こうすることで右肩が顕わになります - は、スンナ<sup>7</sup>です。そしてタワーフを終えるまで、この状態を継続します。
- また、タワーフの最初の**3**周を早足で行い、残りの**4**周は普通に歩いて完遂することもスンナの**1**つです。上記の右肩を顕わにすることと、最初の**3**周を早足で済ませることは男性のみに対して、かつタワーフ・アル＝クドゥーム<sup>8</sup>とタワーフ・アル＝ウムラ<sup>9</sup>のみにおけるスンナです。
- タワーフを開始する際に黒い石のところに来たら、それに正面から向かって手で触れ、キスをします。もしそう出来なければ右手でそれに触れた後、その手にキスをします。もしそれが出来なければ、手に持っている杖などで触れ、それにキスをします。もしそれさえも出来なければ、右手でそれを指すだけに留め、その手にキスすることはしません。そしてタワーフを開始したら歩き続け、途中で停止したりしません。そして黒い石の前

---

1 訳者注：詳しくは「②ミーカート」の項を参照のこと。

2 訳者注：詳しくは「③イフラーーム」の項を参照のこと。

3 訳者注：「タンイーム」とはマッカ北部の聖域境にある地名のことです。マッカ中心部からは約**7**キロ離れています。

4 訳者注：詳しくは「③イフラーーム」の項を参照のこと。尚**4**大法学派の見解では、ウムラの場合タルビヤを唱えるのをやめるのはタワーフ開始時です。

5 訳者注：イスラームにおいて定められたある一定の形式における、心身の清浄化を意図した体の各部位の洗淨。

6 訳者注：「タワーフ」は巡礼（ハッジとウムラ）の諸義務行為の内の**1**つ。アッラーを崇拝するためにカアバ神殿の周囲を**7**回逆時計回りに廻ります。

7 訳者注：預言者ムハンマド（彼にアッラーの祝福と平安あれ）の示した手法や道のこと。ムスリムは可能な限り、彼のスンナを踏襲するべきであるとされています。

8 訳者注：キラーン、あるいはイフラーードのハッジをする者がマッカに到着した際に行うタワーフのこと。根幹的行為でも義務行為でもなく、スンナです。

9 訳者注：文字通り、ウムラの際の根幹的行為としてのタワーフのこと。

を通るたび、毎週**1**回「アッラーフ・アクバル<sup>10</sup>」と唱えます。タワーフ中は各々望みのドゥアー（祈り）をし、アッラーをズィクル（念唱）し、タハリール<sup>11</sup>します。

- そして毎週イエメン柱<sup>12</sup>の前を通るたび、そこを右手で触れます。その際タクビール<sup>13</sup>はせず、キスしたりもしません。もし触れるのが困難な状況であれば、タクビールも手で柱の方を指す仕草もせず、ただそこを通過します。そしてイエメン柱と黒石の柱の間を通過する際に、こう唱えます： - 私たちの主よ、私たちに現世においてよきものと、来世においてよきものをお授け下さい。そして私たちが業火の懲罰からお守り下さい。、（クルアーン **2** : **201**）このようにしてカアバ神殿の周囲を**7**周し、タワーフの際にはヒジュール・イスマーイール<sup>14</sup>の内側には入らないようにします。黒石のある柱を通過するたびにタクビールし、そうすることが可能であれば、それに触れ、キスします。また**2**本のシャーム柱（黒石のある柱とイエメン柱以外の**2**本の柱）には触れません。タワーフが終了したら黒石がある柱とカアバ神殿の扉の間にある場所に胸と顔、両腕をつけて至高のアッラーに祈ったり願い事をしたりすることも出来ます。
- タワーフが終わったら右肩を覆って元の状態に戻し、 - イブラーヒームの立ち所を、サラ（礼拝）の場とせよ。、（クルアーン **2** : **125**）と唱えつつ、イブラーヒームの立ち所<sup>15</sup>へと向かいます。
- もしそうすることが可能であれば、イブラーヒームの立ち所の後部で軽い**2**ラクアのサラ（礼拝）をすることがスナナです。もしひどい混雑などでそう出来なければ、ハラーム・モスク内のどこでそれを行っても問題はありません。**1**ラクア目のアル＝ファーティハ章の後に「不信仰者たちの章：**109**」を、そして**2**ラクア目のアル＝ファーティハ章の後には「純正章：**112**」を唱えることがスナナです。そしてサラの後に特別なドゥアー（祈り）をしたりはせず、速やかにそこを立ち去ります。またイブラーヒームの立ち所でのドゥアーも、根拠のない行いです。
- イブラーヒームの立ち所でのサラを終えたら、黒石の所へ赴き、可能であればそれに触れたりキスしたりすることがスナナです。

---

<sup>10</sup> 訳者注：アッラーこそが最も偉大であり、それ以外のものは全て些少な存在であるという意味が含まれています。

<sup>11</sup> 訳者注：アッラーこそが唯一の主であり、真に崇拝すべき対象であることを唱念するための言葉。「ラー・イラーハ・イッラッラー」という言葉に代表されます。

<sup>12</sup> 訳者注：カアバ神殿を逆時計回りに回った時、黒石のある柱の手前にある柱のこと。

<sup>13</sup> 訳者注：アッラーこそが最も偉大であり、それ以外のものは全て些少な存在であることを唱念するための言葉。「アッラーフ・アクバル」という言葉に代表されます。

<sup>14</sup> 訳者注：カアバ神殿の北面に接する半円形の壁。元来カアバ神殿の中に含まれていた部分であり、それゆえその壁の中は神殿内部と同様であると見なされています。

<sup>15</sup> 訳者注：イブラーヒームがアッラーの命に従ってカアバ神殿を建設する際、その足場にしたと言われる台のこと。カアバ神殿からみて東側の、程近い場所にあります。

- それからサファアの丘<sup>16</sup>に赴きますが、そこに近づいたら、- 実にサファアとマルワ<sup>17</sup>は、アッラーのみしるしの1つである。ゆえにカアバ神殿へのハッジに詣でたり、ウムラを行ったりする者は、その周囲をタワフしても支障はない。そして自ら進んで（義務ではないイバーダや善行を）行う者は、よきものを得よう。実にアッラーは（どのような些細なことであっても）よくお報いになられ、全てをご存知のお方なのである。、（クルアーン 2 : 158）と唱え、「アッラーが始められたことにおいて開始します<sup>18</sup>」と言うことがスンナです。そしてサファアの丘に昇ったら、カアバ神殿の方に向かい、両手を上げて 3 回タクビールします。それから「ラー・イラーハ・イッラッラーフ・ワハダフ・ラー・シャリーカ・ラフ、ラフ＝ル・ムルク、ワ・ラフ＝ル・ハムド、ワ・フワ・アラー・クッリ・シャイイン・カディール。ラー・イラーハ・イッラッラーフ・ワハダフ、アンジャザ・ワダフ、ワ・ナサラ・アブダフ、ワ・ハザマ・アル＝アハザーバ・ワハダフ（いかなる共同者もない、唯一のアッラーの他に真に崇拝すべきものはなし。そしてかれにこそ主権と全ての賛美は属し、かれこそは全能のお方である。唯一のアッラーの他に真に崇拝すべきものはなし。かれはお約束をご遂行され、そのしもべをお助けになり、そしてかれ御 1 人で不信仰の輩を壊滅させられた）<sup>19</sup>」と唱え、それからドゥアー（祈願）に勤しみます。そして前述のズィクル（「ラー・イラーハ・イッラッラーフ...」）を再び唱え、またドゥアーに勤しみます。それから 3 度目の前述のズィクルを唱え、またドゥアーに勤しみます。ズィクルは声に出し、ドゥアーは声を潜めて唱えるようにします。
- それから恐れ慎みつつ、マルワの丘に向けてサファアの丘を降ります。そして緑のシグナルのある地点まで歩き、そこに到達したら次の緑のシグナルまで速足で走ります。それから再びマルワの丘に向けて歩き、その間タハリール<sup>20</sup>やタクビール<sup>21</sup>、ドゥアー（祈願）などに勤しみます。
- マルワの丘に到着したらそこに昇り、カアバ神殿の方に向かってサファアの丘でした同様のことをします。それからマルワの丘を折り、サファアの丘に向かって歩きます。そして走るべき地点にきたら再び走ります。このようにしてサファアとマルワの丘の間を 3 往復半し、終点をマルワの丘で迎えます。この「サアイ」の儀においては、途中で中断したりしないこと、身体が清浄な状態で行うことがスンナです。

<sup>16</sup> 訳者注：下記の訳者注を参考のこと。

<sup>17</sup> 訳者注：「サファアとマルワの丘」とは、マッカのハラーム・モスク内にある全長約 400m の回廊を挟む 2 つの丘。「サファアの丘」から始めてその間を 3 往復半することは「サアイ」と呼ばれ、ハッジとウムラの根幹的行為の内の 1 つです。

<sup>18</sup> 訳者注：クルアーンの句で「サファア」が「マルワ」より先に言及されている通り、「サファア」の丘からサアイの業を開始します、という意味であると言われます。

<sup>19</sup> サヒーフ・アル＝ブハーリー（4114）、サヒーフ・ムスリム（1218）。文章はムスリムのもの。

<sup>20</sup> 訳者注：アッラーこそが唯一の主であり、真に崇拝すべき対象であることを唱念するための言葉。「ラー・イラーハ・イッラッラー」という言葉に代表されます。

<sup>21</sup> 訳者注：アッラーこそが最も偉大であり、それ以外のものは全て些少な存在であることを唱念するための言葉。「アッラーフ・アクバル」という言葉に代表されます。

- タワーフとサアイは連続して行うことがスンナです。そしてサアイが終了したら、剃髪 - こちらの方がよりよいとされます - するか、あるいは頭部全体から均等に頭髪を切るかします。一方女性は指の第1関節位の長さだけ髪を切り、それでもってウムラの完遂とします。そしてイフラームは解除され、それと共に香水や婚姻の契約などのイフラームの禁止事項も全て解禁されます。
- 女性はタワーフとサアイにおいて男性と同様に行いますが、タワーフにおいては男性のするように最初の3周を早足で行わず、また右肩をはだけさせたりもしません。また、サアイで男性が走るべき区間においても走ることはありません。そして装飾品などを露にしたり、声を上げたり、男性の中に混じったりしてしまわないよう気をつけます。
- ウムラのイフラームの後に男がその妻と交わってしまったら、そのままウムラの儀を完遂しなければなりません。そしてその上で、性交ゆえに無効となったウムラを再びやり直す義務を課されます。尚タワーフとサアイの後、そして剃髪あるいは頭髪を切る前に妻と交わってしまった場合には、ウムラは無効となりません。ただ「損害による贖罪<sup>22</sup>」が義務付けられます。
- タマツトゥ（ウムラを終えてからハッジに移行する巡礼形式）を行う者は、もしウムラとハッジの間の期間が短い場合、ウムラの際に頭髪を剃るのではなく切り、ハッジの際に剃髪することが望ましいとされます。
- タワーフ、あるいはサアイの最中に義務のサラ（礼拝）が始まってしまった場合、集団と共にサラします。そしてサラが終了したら、中断した地点から再び始めます。また最初の周からやり直すことはありません。
- **黒石にキスすることの法的見解：**

1ー黒石を通過する際にキスし、触れ、あるいは（手や杖などで）指し示すこと、及びタクビール<sup>23</sup>することはスンナです。それゆえそうすることが困難な場合はそれを放棄し、通常通りタワーフを開始、あるいは継続します。

2ータワーフの際、あるいはタワーフを終えてサアイへと移行する前に黒石にキスし、触れることは、それが可能な者にとってはスンナです。一方タワーフする人たちをかき分けて迷惑をかけるのは許されることではありませんから、そのような場合 - 特に女性は - 黒石へのキスや接触を諦めた方がよいでしょう。というのも黒石に触れるのはスンナ（義務ではなく推奨された行為）ですが、人を害するのは禁じられているからです。ゆえにスンナを行うために禁じられたことを行ってはいけません。

<sup>22</sup> 訳者注：詳しくは「④贖罪」の項を参照のこと。

<sup>23</sup> 訳者注：アッラーこそが最も偉大であり、それ以外のものは全て些少な存在であることを唱念するための言葉。「アッラーフ・アクバル」という言葉に代表されます。

3-カアバ神殿の黒石は楽園から地上に落ちた時、その色は乳よりも純白でした。それが黒く変色したのは、アーダムの子ら（つまり人類）が犯した罪のためなのです。もしその石が無明時代の様々な穢れに影響されていなかったら、それに触れたいかなる病人も癒されずにはいなかったでしょう。審判の日アッラーはその石を召集し、それは自らに真に触れた者を証言します。また黒石とイエメン柱に触れると、罪が免じられます。

### ● タワーフの徳：

タワーフを沢山行うことは、推奨された行いです。

ウバード・ブン・ウマイル（彼にアッラーのご満悦あれ）は、彼の父がイブン・ウマル（彼らにアッラーのご満悦あれ）にこう言うのを聞きました：<sup>f</sup>「あなたが常々黒石の柱とイエメン柱に触れるのを見ますが、それはどういうわけですか？」イブン・ウマルは言いました：「私がそうするのは、アッラーの使徒（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）がこう言うのを聞いたからなのです：「その**2**本の柱に触れれば、罪が免じられよう。」」（アッ=ティルミズィーとアフマドの伝承<sup>24</sup>）

- 清浄な状態でタワーフする方がよりよく、かつ完全でしょう。小さな穢れ<sup>25</sup>の状態でタワーフしても有効ですが、大きな穢れ<sup>26</sup>の状態である場合はそれを清めなければなりません<sup>27</sup>。

---

<sup>24</sup> 真正な伝承。スナン・アッ=ティルミズィー（959）、ムスナド・アフマド（4462）。文章はアフマドのもの。

<sup>25</sup> 訳者注：「小さな穢れ」とは、排便、放屁、熟睡や失神や酩酊などによる一時的な分別の喪失などによって陥る状態のことです。

<sup>26</sup> 訳者注：「大きな穢れ」とは、精液の発射、性交、月経や産後の出血などによって陥る状態のことです。

<sup>27</sup> 訳者注：4 大法学派は、タワーフにおいて「大きな穢れ」のみならず「小さな穢れ（排便、放屁、熟睡や失神や酩酊などによる一時的な分別の喪失などによって陥る状態のこと）」からも清浄であることを義務付けています。

# ハッジの形

[ 日本語 ]

صفة الحج

[ اللغة اليابانية ]

ムハンマド・ブン・イブラーヒーム・アツ＝トゥワイジリー

محمد بن إبراهيم التويجري

翻訳者: サイード佐藤

ترجمة: سعيد ساتو

校閲者: ファーティマ佐藤

مراجعة: فاطمة ساتو

海外ダアワ啓発援助オフィス組織 (リヤド市ラブワ地区)

المكتب التعاوني للدعوة وتوعية الجاليات بالربوة بمدينة الرياض

1429 – 2008

islamhouse.com

## ⑧ハッジの形

ここではアッラーの使徒（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）が私たちに明らかにし、そしてその教友（彼らにアッラーのご満悦あれ）に命じたところのハッジについて説明します。

- マッカに滞在中の者、あるいはマッカ居住者は、タルウィヤの日<sup>1</sup> - ズー・アル＝ヒッジャ月<sup>2</sup>の 8 日 - の正午前にグスル<sup>3</sup>し、体をきれいにし、香水をつけてからハッジのためのイフラーム<sup>4</sup>に入ることがスンナ<sup>5</sup>です。イフラームに入るのは居住している、あるいは滞在しているその場所からで、その際には「ハッジのためにあなたの御許に馳せ参じます」と唱えます。一方キラーン（ハッジとウムラを同時進行する巡礼形式）かイフラード（ハッジのみを行う巡礼形式）を行おうとする場合は、イードの日 - ズー・アル＝ヒッジャ月の 10 日 - にアル＝アカバのジャムラ<sup>6</sup>の投石をするまでイフラームの状態のままにいますることになります。
- ハッジに臨む者はその日の正午前、タルビヤ<sup>7</sup>を唱えつつミナー<sup>8</sup>に向かいます。そしてそこで、ズフル（正午過ぎの礼拝）とアスル（午後遅くの礼拝）とマグリブ（日没後の礼拝）とイシャー（夜の礼拝）とファジュル（夜明け前の礼拝）を短縮の形<sup>9</sup>で、まとめて<sup>10</sup>集団で行います。そしてその晩はミナーで過ごします。
- ズー・アル＝ヒッジャ月 9 日 - アラファ<sup>11</sup>の日 - の朝を迎えたら、タルビヤやタクビー<sup>12</sup>を唱えつつミナーからアラファへと向かいます。そして正午まで、アラファの領域に入る手前の場所に位置するナミラ<sup>13</sup>に留まります。

---

1 訳者注：「タルウィヤ」とは元来、水の供給を意味します。というのもヒジュラ暦 8 日に赴くことになっているミナーには本来水がなく、それゆえにこの日は水をミナーに運ぶことになっていたからです。

2 訳者注：ヒジュラ暦 12 月のこと。

3 訳者注：心身の清浄化を意図した全身の洗浄。

4 訳者注：詳しくは「③イフラーム」の項を参照のこと。

5 訳者注：預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）の示した手法や道のこと。ムスリムは可能な限り、彼のスンナを踏襲するべきであるとされています。

6 訳者注：「ジャムラ」とはマッカ近郊の巡礼者宿营地「ミナー」にある、大小中 3 本の投石塔。ヒジュラ暦 12 月 10 日に最大の柱「アル＝アカバ」に 7 個、そして 11、12、13 日には各柱に 7 個ずつの小石を投石することになっています。

7 訳者注：詳しくは「③イフラーム」の項を参照のこと。

8 訳者注：マッカ東部に位置する谷間。ズー・アル＝ヒッジャ月の 8 日、11 日、12 日、13 日には実質上ハッジ巡礼者の宿营地となります。

9 訳者注：つまり 4 ラクアのサラーを 2 ラクアに短縮すること。それ以外の数のラクアは短縮されず、そのまま行われます。

10 訳者注：つまりズフルとアスル、あるいはマグリブとイシャーをまとめて連続した形では行いません。

11 訳者注：「アラファ」とはヒジュラ暦 12 月の 9 日目、ハッジの巡礼者たちが赴くことを義務付けられているマッカ近郊の台地。この日この地でアッラーを念じ、タルビヤを唱え、祈り、犯した罪の赦しを乞う事は、預言者（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）の「ハッジはアラファである。」という言葉が示す通り、ハッジのメインイベント的意味合いを持っています。

12 訳者注：アッラーこそが最も偉大であり、それ以外のものは全て些少な存在であることを唱念するための言葉。「アッラーフ・アクバル」という言葉に代表されます。



● アラファの台地の区域：

東部は、アラファを見下ろしてその台地を囲む形で連なる山々までで、西部はウラナ峡谷の手前までです。北部はウラナ峡谷とワスィーク峡谷の合流地点、そして南部はナミラ・モスクから南に約 **1.5km** の地点までとされます。

● そして正午過ぎたら、アラファへと向かいます。ウラナ峡谷の中ほどの場所にあるナミラ・モスクでイマームが説教しますが、それが終わるとズフル（正午過ぎの礼拝）のアザーン（礼拝時間に入ったことを告げる呼びかけ）<sup>14</sup>がなされます。それからイカーマ（礼拝開始の合図）が告げられ、イマームによってズフルとアスル（午後遅くの礼拝）が各々**2**ラクアに短縮され、まとめられた形で率いられます<sup>15</sup>。その際**1**度のアザーンと、**2**度のイカーマによって**2**つの礼拝が行われる形となります。尚、もしイマームと共にナミラ・モスクで礼拝するのが困難な場合は、滞在している場所で同行者と共に**2**つの礼拝を前述したような短縮・まとめた形で行います。

● 礼拝が終わったらラフマ山の麓を目指してアラファの台地へと向かい、ラフマ山が自分とキブラ（ハラーム・モスクの方向）の間にあたる位置に場所を取るのがスナナです。その際、山を幾らか自分の右側にし、通行路が自分の正面に来るようにします。そして山の麓の岩の周辺に立ち、両手を上げ、畏れへりくだりつつアッラーのズィクル（念唱）やドゥアー（祈願）、イスティグファール（アッラーに罪の赦しを乞うこと）やタルビヤ、タハリール<sup>16</sup>などに専念します。その間乗り物に乗っていても、地面に座っていても、あるいは立っていても、歩っていても構いません。最も良いのは、本人が最も恐れ慎み、かつ専念することの出来る状態でしょう。

● こうしてクルアーンとスナナに記述されたドゥアー（祈願）や、それ以外の好みのドゥアー、イスティグファール（アッラーに罪の赦しを乞うこと）やタクビール<sup>17</sup>、タハリール<sup>18</sup>、偉大かつ荘厳なるアッラーへの讃美、預言者（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）に対する祈りなどを数多く唱えます。またその際に偉大かつ荘厳なるアッラーに

---

<sup>13</sup> 訳者注：ミナーから見てアラファの手前に位置する場所の名で、アラファの中には入りません。

<sup>14</sup> 訳者注：礼拝を呼びかける一連の文句のこと。「アッラーフ アクバル（**2**回）、アッラーフ アクバル（**2**回）、アシュハドゥ アッラー イラーハ イッラッラー（**2**回）、アシュハドゥ アンナ ムハンマダッラッスルッラー（**2**回）、ハイヤー アラッサラー（**2**回）、ハイヤー アラルファラーハ（**2**回）、アッラーフ アクバル（**2**回）、ラー イラーハ イッラッラー。」

<sup>15</sup> 訳者注：アスルをズフルの時間帯に行う、「ジャムア・タクディーム（時間帯が互いに隣接した**2**つの礼拝を、順番が早い方の礼拝の時間帯にまとめて行うこと）」の形となります。

<sup>16</sup> 訳者注：アッラーこそが唯一の主であり、真に崇拝すべき対象であることを唱念するための言葉。「ラー・イラーハ・イッラッラー」という言葉に代表されます。

<sup>17</sup> 訳者注：アッラーこそが最も偉大であり、それ以外のものは全て些少な存在であることを唱念するための言葉。「アッラーフ・アクバル」という言葉に代表されます。

<sup>18</sup> 訳者注：アッラーこそが唯一の主であり、真に崇拝すべき対象であることを唱念するための言葉。「ラー・イラーハ・イッラッラー」という言葉に代表されます。

対してへりくだり、かつ願い事を即叶えて欲しいという熱意と執拗さをもって祈ります。そして太陽が沈むまで、この状態を継続します。

- もしラフマ山付近に赴くことが困難なようであれば、アラファのどこに留まって同様のことに専念しても問題はありません。アラファの台地は、ウラナ中心部を除いたその全てが立ち所なのであります。

- **アラファに立つべき時間：**

アラファに留まるべき時間は、正午過ぎから日没までです。そしてアラファに滞在したと見なされる最終時刻はズー・アル＝ヒッジャ月 **10** 日のファジュール前までであり、ゆえに **9** 日の午前中、あるいは夜中にアラファに入っても問題はなりません。但しスナは正午過ぎにアラファ入りすることです。また夜中にアラファに足を踏み入れた者は、例えそれが一瞬だけであっても、それだけでアラファの行事に参加したと見なされます。また「アラファの地に立つ」ということは文字通り両の足で立ち通すことではなく、乗り物の上であれ、あるいは地面の上であれ、その地に滞在することを意味します。そして、昼間アラファに入っておきながら日没前にそこを立ち去るのは推奨された行為を放棄することですが、それでハッジが無効となったり、あるいは贖罪が義務付けられたりするわけではありません。

ウルワ・ブン・ムダッリス（彼にアッラーのご満悦あれ）によれば、彼は預言者（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）がムズダリファ<sup>19</sup>でファジュール（夜明け前の礼拝）をしようとしているところにやって来ました...中略...それで預言者（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）は彼に言いました：「昼間であろうと夜であろうとアラファに立ち、それからこの礼拝を私たちと共に行い、またここを出発するまで私たちと共にここに滞在した者は、実にハッジを完遂し、その行を終えたのである。」（アブー・ダーウードとアッ＝ティルミズィーの伝承<sup>20</sup>）

- そして日没を迎えたら、タルビヤを唱えながらアラファからムズダリファへと一斉に向かいます。その際には静粛さを保ち、自らや乗り物でもって人々をかき分けたりしないようにし、空間的にそうすることが十分な余裕がある時だけ歩を早めます。そしてムズダリファに到着したら、**1**つのアザーン（礼拝時間に入ったことを告げる呼びかけ）と**2**つのイカーマ（礼拝開始の合図）でもって、**3**ラクアのマグリブ（本来は日没直後の礼拝）と**2**ラクアのイシャー（夜の礼拝）をジャムア・タアヒール<sup>21</sup>の形で行います。そしてその晩はそこで宿営し、タハッジト<sup>22</sup>とウィトル<sup>23</sup>を行います。

<sup>19</sup> 訳者注：「ムズダリファ」とは、ヒジュラ暦 **12** 月 **9** 日の夜を過ごすことになっているマッカ近郊の場所。

<sup>20</sup> 真正な伝承。スナン・アブー・ダーウード（**1950**）、スナン・アッ＝ティルミズィー（**891**）。文章はアッ＝ティルミズィーのもの。

<sup>21</sup> 訳者注：時間帯が互いに隣接した **2** つの礼拝を、順番が遅い方の礼拝の時間帯にまとめて行うこと。

<sup>22</sup> 訳者注：深夜に任意で行う礼拝。普通は一旦寝た後に、そのために深夜に起き上がってする礼拝のこ

- ファジュールの時間帯に入ったら、その最初の時間帯のまだ周りが暗い内に、スナナの 2 ラクアをしてからファジュールの礼拝を行います。ファジュールを終えたら現在のムズダリファ・モスク周辺にあたる「アル＝マシュアル・アル＝ハラーム」へと赴き、キブラに向かって立ちながら、あるいは乗り物に乗りながら、あるいは座りながらアッラーをズィクル（念唱）し、タハミート<sup>24</sup>し、タハリール<sup>25</sup>し、タクビール<sup>26</sup>し、タルビヤを唱え、ドゥアー（祈願）します。そして崇高なるアッラーの次の御言葉が示すように、周囲が明るむ頃までこの状態です：- **そしてあなた方がアラファから一斉にやって来たのなら、アル＝マシュアル・アル＝ハラームでアッラーをズィクル（念唱）するのだ。**、  
（クルアーン 2 : 198）
- もし「アル＝マシュアル・アル＝ハラーム」に赴くことが困難であってもムズダリファ全体が立ち所と見なされますから、その場でキブラの方角に向かってドゥアーするようにします。また正当な理由のある男女、及び弱者はその同伴者らと共に、月が見えなくなった時点で、あるいは夜の大半が経過した時点でムズダリファを去ってミナーへと向かうことができます。そして彼らはミナーに到着したら、アル＝アカバのジャムラ<sup>27</sup>に投石することが可能です。
- それ以外の巡礼者たちは、太陽が昇る前に静粛さをもって、ムズダリファからミナーへと向かいます。そしてムズダリファとミナーの間地点にあるムハッスィル谷に差し掛かったら、石が転がる位の速度でもって歩を、あるいは乗り物を速めます。尚、ムズダリファやジャムラートへ向かう道中で 7 個の小石を拾っておくことを忘れてはなりません。道中ではタルビヤやタクビールを唱えつつ進みますが、アル＝アカバのジャムラに投石する前にはタルビヤを唱えるのを止めます。
- ミナーから見て 3 本のジャムラの内最後のそれにあたるアル＝アカバのジャムラに到着したら、既に太陽が昇っていることを条件に、7 つの小石を投石します。その際ミナーが自分の右に、マッカが左側に来るようにして行います。そして投石の際には右手を上げて投げるようにし、逐一タクビールするようにします。

---

とを言います。一方キヤーム・アッ＝ライル（夜中にする任意のサラ）はもっと広い意味で用いられ、夜全般に渡って行われる任意の礼拝全てを指します。

<sup>23</sup> 訳者注：「ウイトル」とは、イシャー後からファジュール前までに行うのがスナナ・ムアッカダ（義務ではないが非常に推奨された行為）とされている、奇数回の形式をとる礼拝のこと。

<sup>24</sup> 訳者注：アッラーにこそ全ての賛美があると唱念すること。「アル＝ハムドリッラー」という言葉に代表されます。

<sup>25</sup> 訳者注：アッラーこそが唯一の主であり、真に崇拝すべき対象であることを唱念するための言葉。「ラー・イラーハ・イッラッラー」という言葉に代表されます。

<sup>26</sup> 訳者注：アッラーこそが最も偉大であり、それ以外のものは全て些少な存在であることを唱念するための言葉。「アッラーフ・アクバル」という言葉に代表されます。

<sup>27</sup> 訳者注：「ジャムラ」とはマッカ近郊の巡礼者宿营地「ミナー」にある、大小中 3 本の投石塔。ヒジュラ暦 12 月 10 日に最大の柱「アル＝アカバ」に 7 個、そして 11、12、13 日には各柱に 7 個ずつの小石を投石することになっています。

- ジャムラに投げる小石は、ヒヨコ豆やヘーゼルナッツの実程度の大きさであることがスンナです。大きな石や、石以外の何か - サンドルや靴下、宝石や金属類など - を投げてはなりません。また投石のみに関わらず、周りの人を押しのけたりして迷惑をかけてはいけません。
- そして投石が終わったら、タマツトウ(ウムラを終えてからハッジに移行する巡礼形式)とキラーン(ハッジとウムラを同時進行する巡礼形式)を行っている者は、犠牲を屠ります。もし自ら犠牲を屠る場合には、こう唱えます：「ビスマッラーヒ・ワッラーフ・アクバル、アッラーフンマ・タカッバル・ミンニー(アッラーの御名において。アッラーは偉大なり。アッラーよ、私のこの行いをお受け入れ下さい)」

アナス(彼にアッラーのご満悦あれ)によれば、預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は白地に黒の斑点がある角の生えた**2**頭の雄羊を、自らの手で屠りました。そして(その際には)アッラーの御名を唱え、タクビールし、足を首の片面に置き(押さえつけ)ました。(アル=ブハーリーとムスリムの伝承<sup>28</sup>)

また犠牲の肉を自ら食し、そのスープを飲み、困窮者に施すことはスンナです。望むならば、その肉を携帯して持ち帰ることも可能です。

- 犠牲を屠った後は、男性ならば剃髪するか、頭髪を切るかしますが、剃髪の方がよりよいとされます。その際、頭部の右側から始めることがスンナです。一方女性は、指の第**1**関節ほどの長さだけ頭髪を切るだけに留めます。

アブー・フライラ(彼にアッラーのご満悦あれ)は言いました：「アッラーの使徒(彼にアッラーからの平安と祝福あれ)は言いました：「アッラーよ、剃髪する者たちにご慈悲を。」(教友たちは)言いました：「アッラーの使徒よ、頭髪を切るだけに留める者たちには(アッラーのご慈悲を乞うてくれないのですか)？」(預言者は)言いました：「アッラーよ、剃髪する者たちにご慈悲を。」(教友たちは)言いました：「アッラーの使徒よ、頭髪を切るだけに留める者たちには(アッラーのご慈悲を乞うてくれないのですか)？」(預言者は)言いました：「アッラーよ、剃髪する者たちにご慈悲を。」(教友たちは)言いました：「アッラーの使徒よ、頭髪を切るだけに留める者たちには(アッラーのご慈悲を乞うてくれないのですか)？」(預言者は)言いました：「そして頭髪を切るだけに留める者たちにも(ご慈悲を垂れたまえ)」(アル=ブハーリーとムスリムの伝承<sup>29</sup>)

- これまでに述べた事を全て行えば、イフラームの部分解禁となります。それで女性との性交渉を除く全てのイフラームにおける禁止事項 - 通常 of 衣服の着用、香水の使用、男性が頭を覆うことなど - はこの時点で解除されます。イフラームの部分解禁は、例え剃

<sup>28</sup> サヒーフ・アル=ブハーリー (5558)、サヒーフ・ムスリム (1966)。文章はムスリムのもの。

<sup>29</sup> サヒーフ・アル=ブハーリー (1728)、サヒーフ・ムスリム (1302)。文章はムスリムのもの。

髪や頭髪を切ることや犠牲の屠殺を終えていなくても、アル＝アカバのジャムラ<sup>30</sup>への投石さえ行えば達成されます。但し犠牲用の家畜を連れている場合は、それを屠らない限り、投石をしてもイフラームの部分解禁は成されません<sup>31</sup>

- イマームはイードの日 - ズー・アル＝ヒッジャ月 **10** 日 - の午前中に、ハッジの行事について人々に教示すべく、ジャムラートで説教することがスンナです。それから巡礼者たちは衣服を身に纏い、香水をつけ、マッカへと向かいます。そしてハッジのタワーフ、つまり「タワーフ・アル＝イファーダ<sup>32</sup>」あるいは「タワーフ・アッ＝ズィヤーラ<sup>33</sup>」を行います。その際「タワーフ・アル＝クドゥーム<sup>34</sup>」の最初の **3** 周に行ったような早足はしません。
- それからタマツトゥ（ウムラを終えてからハッジに移行する巡礼形式）をしている者であれば、サファーとマルワの丘のサアイ<sup>35</sup>に移行します。もし既にサアイを行ってればこの日に再びサアイする必要はありませんが、行った方がよいでしょう<sup>36</sup>。またキラーン（ハッジとウムラを同時進行する巡礼形式）あるいはイフラード（ハッジのみを行う巡礼形式）を行っている者でも、もしタワーフ・アル＝クドゥームと一緒にサアイを済ませていなければ、ここでサアイをする必要があります。もし既にタワーフ・アル＝クドゥームと共に済ませていれば - それがいよいよ良いでしょう - 、タワーフ・アル＝イファーダの後はサアイしません。こうして女性との性交渉を含む、イフラームの禁止事項全てが解禁となります。これを「イフラームの完全解禁」と呼びます。
- **タワーフ・アル＝イファーダの開始時期は：**

<sup>30</sup> 訳者注：「ジャムラ」とはマッカ近郊の巡礼者宿営地「ミナー」にある、大小中3本の投石塔。ヒジュラ暦 **12** 月 **10** 日に最大の柱「アル＝アカバ」に **7** 個、そして **11**、**12**、**13** 日には各柱に **7** 個ずつの小石を投石することになっています。

<sup>31</sup> 訳者注：この見解はマーリク学派と **1** 部のハンバリー学派のもので、ハナフィー学派とシャーフィイー学派、ハンバリー学派の主流では①アル＝アカバへの投石、②散髪あるいは剃髪、③タワーフ・アル＝イファーダの **3** つの内の **2** つを終了した時点で（ハッジのサアイを行っていることを条件に）、イフラームの部分解禁は達成されます。

<sup>32</sup> 訳者注：「イファーダ」というアラビア語には「押し寄せる」という意味がありますが、これは巡礼者がミナーからマッカへと、このタワーフのために一斉に押し寄せて来ることにその名称の由来があると言われます。

<sup>33</sup> 訳者注：「ズィヤーラ」とはアラビア語で「訪問」という意味ですが、ここでは巡礼者がこのタワーフゆえにミナーからマッカへと訪れることを表していると言われます。

<sup>34</sup> 訳者注：キラーン、あるいはイフラードのハッジをする者がマッカに到着した際に行うタワーフのこと。根幹的行為でも義務行為でもなく、スンナです。

<sup>35</sup> 訳者注：「サアイ」とは、「サファーとマルワの丘」の間を「サファーの丘」から始めて **3** 往復半することで、ハッジとウムラの根幹的行為の内の **1** つです。

<sup>36</sup> 訳者注：これはハンバリー学派の一部とイブン・タイミーヤの見解であり、他の **4** 大法学派の多勢の見解では、タマツトゥを行う者はウムラのためのサアイとハッジのためのサアイを行わなければならないとしています。

イードの日 - ズー・アル=ヒッジヤ月 **10** 日目 - の夜<sup>37</sup>の大半が過ぎてから行うことができますが、日中に行った方がより良いでしょう。その日以降に遅らせることも出来ますが、正当な理由がない限りズー・アル=ヒッジヤ月中に行わなければなりません。

- それからミナーへと戻り、そこでズフル（正午過ぎの礼拝）を行います。そしてそこでイードの日の残りとして、アイヤーム・アッ=タシュリーク<sup>38</sup>を過ごします。アイヤーム・アッ=タシュリークの **13** 日目の滞在は義務ではありませんが、完遂した方が良いでしょう。また、もしアイヤーム・アッ=タシュリークにおいてミナーで夜の大半を過ごすことが困難なようなら、毎晩少しだけでも良いので夜の一部 - 前半、中盤、後半に関わらず - をミナーで過ごすようにします。またアイヤーム・アッ=タシュリークでは毎日 **5** 度の義務の礼拝を集団で、規定時間通りに行います。その際各礼拝は短縮<sup>39</sup>して行いますが、ジャムア<sup>40</sup>はしません。礼拝はマスジド・アル=ハイブ<sup>41</sup>で行うことが望ましいのですが、それが困難なようであればミナーのいかなる場所で行っても問題はありませぬ。アイヤーム・アッ=タシュリークの間は、毎日正午過ぎに **3** 本のジャムラート<sup>42</sup>に投石します。
- ジャムラートには可能な限り、徒歩で赴くことがスナナです。ズー・アル=ヒッジヤ月 **11** 日目は正午過ぎに最初のジャムラ（最小のもの）へと向かい、**7** つの小石を連続して投石します。投石の際には右腕を高く上げて投げ、石を投げる度に「アッラーフ・アクバル<sup>43</sup>」と唱えます。またキブラの方角（カアバ神殿の方角）に向かって行うことが望ましいとされます。そして投石が終了したら前方に少し進み出て、ジャムラからいくらか右側に立ち、キブラに向かって両手を上げつつ長いドゥアー（祈願） - 預言者（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）はクルアーンの雌牛章を読み終える位の長さのドゥアーをしたと伝えられています - をします。
- それから中位のジャムラへと赴きます。そして同様に右腕を高く上げつつ **7** 個の小石を投げ、石を投げる度に「アッラーフ・アクバル」と唱えます。それから前方左側へと進み出て、キブラに向かって両手を上げつつ長いドゥアー（祈願） - 最初の時よりは短めに - をします。

<sup>37</sup> 訳者注：ヒジュラ暦は **1** 日の始まりが日没と共に始まりますので、ここではアラファに立った後、ムズダリファで過ごす日の夜のことを示しています。西暦的感覚から言うと、イードの日の前の晩のことです。

<sup>38</sup> 訳者注：ヒジュラ暦 **12** 月の **11**, **12**, **13** 日の **3** 日間のこと。

<sup>39</sup> 訳者注：**4** ラクアの礼拝を **2** ラクアに短縮するということです。ゆえにマグリブとファジュールの礼拝は通常通りに行います。

<sup>40</sup> 訳者注：時間帯が互いに隣接した **2** つの礼拝を、どちらか一方の礼拝の時間帯にまとめて行うこと。

<sup>41</sup> 訳者注：預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安がありますよう）がミナー滞在中に礼拝を行ったモスクで、彼以前にも **70** 名の預言者がそこで礼拝をしたという伝承が残っています。ミナーの南部、最小のジャムラ近くに位置しています。

<sup>42</sup> 訳者注：マッカ近郊の巡礼者宿营地「ミナー」にある、大小中 **3** 本の投石塔。ヒジュラ暦 **12** 月 **10** 日に最大の柱に **7** 個、そして **11**, **12**, **13** 日には各柱に **7** 個ずつの小石を投石することになっています。

<sup>43</sup> 訳者注：アッラーこそが最も偉大であり、それ以外のものは全て些少な存在であることを唱念するための言葉。

- そしてアル＝アカバのジャムラ - 最大のジャムラ - へと移行します。マッカを自分の左手に、ミナーを右手にした位置から投石するのがスンナで、やはり **7** 個の小石を同様の形で投げます。尚投石後のドゥアーはありません。こうして計 **21** 個の小石を投石したことになります。ミナーで宿泊出来ない正当な理由がある者は、**2** 日分の投石を **1** 日にまとめて、あるいはアイヤーム・アッ＝タシュリークの最終日にまとめて行うことが可能です。また夜間に投石しても問題はありません。
- アイヤーム・アッ＝タシュリークの **2** 日目 - ズー・アル＝ヒッジャ月 **12** 日目 - も初日と同様、正午過ぎに **3** 本のジャムラートに投石します。
- ミナーを早く立ち去りたい場合は、アイヤーム・アッ＝タシュリーク **2** 日目の日没前にミナーを出発しなければなりません。もし遅れてしまったら、**3** 日目の正午過ぎにもまた **3** 本のジャムラートに投石する義務が生じます - そしてミナーでアイヤーム・アッ＝タシュリークの **3** 日目を過ごすことはスンナです - 。女性は男性と同じようにこれらの行を遂行します。こうして巡礼者は、ハッジの諸行を終えたことになります。
- 預言者（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）が行ったハッジは、「別れのハッジ」ただ **1** 度きりでした。彼はそこにおいてハッジの行を完遂し、人々をアッラーへといざない、また彼のウンマ（共同体）にも人々をアッラーへといざなう義務を課しました。そしてアラファにおいてイスラームの教えは完結し、イードの日には彼のウンマに「ここに居合わせた者は、ここにいない者に（私がここで伝えたことを）伝えるのだ」（アル＝ブハーリーとムスリムの伝承<sup>44</sup>）という宗教義務を課したのです。
- ハッジの完遂後、サラ（礼拝）やサウム（齋戒）など他のイバーダ（崇拝行為）を終えた時と同様に、服従行為の遂行を実現させて下さった偉大かつ荘厳なるアッラーをズィクル（念唱）し、また義務の遂行を容易にして下さったかれを讃え、かつ「ハッジの義務を果たしたんだぞ」などという思い上がりや、イバーダを完全な形で終えたなどという勘違いをすることなく、自分の至らなさに関してかれに罪の赦しを乞うことが求められます。至高のアッラーはこう仰られました：- **そして諸行を完遂したら、あなた方が父親のことをズィクル（想念）するように、あるいはそれ以上の強さでもってアッラーをズィクルするのだ。**、（クルアーン **2** : **200**）
- それからアイヤーム・アッ＝タシュリークの **3** 日目 - ズー・アル＝ヒッジャ月 **13** 日目の正午過ぎに例のように投石した後、ミナーを立ち去ります。その際もし可能ならアル＝アブタフ<sup>45</sup>に立ち寄り、そこでズフルとアスルとマグリブとイシャーの礼拝を行い、夜の一部分を過ごすことがスンナです。

<sup>44</sup> サヒーフ・アル＝ブハーリー（**67**）、サヒーフ・ムスリム（**1679**）。文章はアル＝ブハーリーのもの。

<sup>45</sup> 訳者注：マッカとミナーの間にある場所の名前です。

- そしてマッカへと向かい、マッカの住民と月経中あるいは産後の出血のある女性以外の者はタワーフ・アル＝ワダーア<sup>46</sup>を行います。タワーフ・アル＝ワダーアを終えたら、各自マッカを立ち去ります。その際に、ザムザムの水<sup>47</sup>を携帯して持って行くのもよいでしょう。

イブン・アッバース（彼らにアッラーのご満悦あれ）によれば、アッラーの使徒（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）は言いました：「人々は最後の任務として、カアバ神殿（のタワーフ）を命じられた。但し月経中の女性にはそれが免除されている。」（アル＝ブハーリーとムスリムの伝承<sup>48</sup>）

---

<sup>46</sup> 訳者注：巡礼を終えてマッカを立ち去る直前に行うタワーフのことです。ハッジにける義務行為の1つに数えられます。

<sup>47</sup> 訳者注：カアバ神殿東方約20mの地点に、その泉があります。イブラーヒームの女奴隷であったハージャルが不毛の地であったマッカに置き去りにされた時、乳飲み子のイスマーイールを抱えてサファーとマルワの間を糧を求めて奔走した際、大天使ジブリールが舞い降りてその羽で地面を打ち、ザムザムの泉を沸き出させたと言われています。

<sup>48</sup> サヒーフ・アル＝ブハーリー（1755）、サヒーフ・ムスリム（1328）。



# ハッジとウムラに関する法的見解

[ 日本語 ]

## أحكام الحج والعمرة

[ اللغة اليابانية ]

ムハンマド・ブン・イブラーヒーム・アツ＝トゥワイジリー

محمد بن إبراهيم التويجري

翻訳者: サイード佐藤

ترجمة: سعيد ساتو

校閲者: ファーティマ佐藤

مراجعة: فاطمة ساتو

海外ダアワ啓発援助オフィス組織 (リヤド市ラブワ地区)

المكتب التعاوني للدعوة وتوعية الجاليات بالربوة بمدينة الرياض

1429 – 2008

islamhouse.com

## ⑨ハッジとウムラに関する法的見解

### ● イードの日 - ズー・アル=ヒッジャ月<sup>1</sup>10 日目 - の諸行：

ハッジを行う巡礼者は、以下のようにイードの日の諸行を順序付けるのがよいでしょう：①アル=アカバのジャムラ<sup>2</sup>の投石、②犠牲、③剃髪あるいは頭髪を切ること、④タワーフ・アル=イファーダ<sup>3</sup>、⑤サアイ<sup>4</sup>。この順番で行うことはスンナ<sup>5</sup>ですので、もし剃髪を犠牲の前に行ったり、タワーフを投石より前倒しにしたりしても支障はありません。

### ● 犠牲を屠るべき時期はイードの日から、アイヤーム・アッ=タシュリーク<sup>6</sup>の 3 日目 - つまりズー・アル=ヒッジャ月 13 日目 - の日没前までです。

アブドッラー・ブン・アムル・ブン・アル=アース（彼らにアッラーのご満悦あれ）によれば、アッラーの使徒（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）は「別れのハッジ」の際ミナーに立って、人々に質問されていました。するとそこに 1 人の男がやって来て、こう言いました：「<sup>f</sup> 知らずに、犠牲を屠る前に剃髪してしまったのですが。」（アッラーの使徒は）言いました：「（犠牲を）屠るがよい。問題はない。」すると今度は別の男が来て、こう言いました：「知らずに、投石する前に（ラクダの）犠牲を屠ってしまったのですが。」（アッラーの使徒は）言いました：「投石するがよい。問題はない。」こうして預言者（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）は（イードの日の諸行の順番が）前倒しになったり後回しになったりしたことについて尋ねられても、「（これこれを）するがよい。問題はない」と言うのみでした。」（アル=ブハーリーとムスリムの伝承<sup>7</sup>）

### ● ジャムラート<sup>8</sup>の投石を遅らせることに関する法的見解：

そもそも投石は規定時間通りに行うのがスンナです。

しかし家畜番や病人など正当な理由のある者、あるいは人の混雑によって被害を被るよ

1 訳者注：ヒジュラ暦 12 月のこと。

2 訳者注：「ジャムラ」とはマッカ近郊の巡礼者宿营地「ミナー」にある、大小中 3 本の投石塔。ヒジュラ暦 12 月 10 日に最大の柱「アル=アカバ」に 7 個、そして 11、12、13 日には各柱に 7 個ずつの小石を投石することになっています。

3 訳者注：「イファーダ」というアラビア語には「押し寄せる」という意味がありますが、これは巡礼者がミナーからマッカへと、このタワーフのために一斉に押し寄せて来ることにその名称の由来があると言われます。

4 訳者注：「サアイ」とは、「サファーとマルワの丘」の間を「サファーの丘」から始めて 3 往復半することで、ハッジとウムラの根幹的行為の内の 1 つです。

5 訳者注：預言者ムハンマド（彼にアッラーの祝福と平安あれ）の示した手法や道のこと。ムスリムは可能な限り、彼のスンナを踏襲するべきであるとされています。

6 訳者注：ヒジュラ暦 12 月の 11、12、13 日の 3 日間のこと。

7 サヒーフ・アル=ブハーリー（83）、サヒーフ・ムスリム（1306）。文章はアル=ブハーリーのもの。

8 訳者注：マッカ近郊の巡礼者宿营地「ミナー」にある、大小中 3 本の投石塔。ヒジュラ暦 12 月 10 日に最大の柱に 7 個、そして 11、12、13 日には各柱に 7 個ずつの小石を投石することになっています。

うな者は、アイヤーム・アッ=タシュリークの投石をその最終日 - ズー・アル=ヒッジャ月 13 日目 - まで遅らせることができます。その際はまず 11 日目の分を最小のジャムラ、中位のジャムラ、アル=アカバのジャムラ<sup>9</sup>と順番に行い、それから 12 日目と 13 日目の分も同様に投石していきます。正当な理由もなくアイヤーム・アッ=タシュリーク<sup>10</sup>の投石を 13 日以降にまで遅らせることは罪ですが、理由があるならば罪はありません。そしてそのどちらの場合も規定時期が既に経過してしまったことにより投石の機会は失われますが、ハッジ自体は有効です。

● 家畜番、あるいは交通警察や警備員、巡礼ガイドや医師など巡礼者全体の福利のために勤しむ者は、その必要があればアイヤーム・アッ=タシュリークにミナーで夜を過ごしなくともかまいません。そしてそのことによって贖罪を課されることもありません。

● ミナーの境界：

東西はムハッスィルの谷（ムズダリファとミナーの中間地点）とアル=アカバのジャムラの間、南北はミナーを囲う山々までです。

● ムズダリファ<sup>11</sup>の境界：

東はアル=マアザマーン路の西端、西はムハッスィルの谷、北はスパイル山、南はアル=マリーヒーヤートウの山々までです。

● アイヤーム・アッ=タシュリークにおいてジャムラートに投石する時期：

1- イードの日以降のジャムラートの投石は全て、正午以降です。午前中に投石した場合は、それを午後やり直さなければなりません。やり直さないままアイヤーム・アッ=タシュリーク 3 日目の日没を迎えることは罪となり、それ以降は投石の規定時期が経過してしまったことにより投石の機会は失われます。但しそのハッジ自体は有効です。

2- 投石をする者にとって、アイヤーム・アッ=タシュリークの 3 日間は 1 日に等しいものと見なされます。ゆえに 1 日に、その日の分の投石と別の日の分の投石をすることも可能であり、そうすることによって何の罪もありません。しかし毎日規定通りの投石をすることが最善です。

● タワーフ・アル=イファーダ<sup>12</sup>を遅延させることに関する法的見解：

---

<sup>9</sup> 訳者注：「ジャムラ」とはマッカ近郊の巡礼者宿當地「ミナー」にある、大小中 3 本の投石塔。ヒジュラ暦 12 月 10 日に最大の柱「アル=アカバ」に 7 個、そして 11、12、13 日には各柱に 7 個ずつの小石を投石することになっています。

<sup>10</sup> 訳者注：ヒジュラ暦 12 月の 11、12、13 日の 3 日間のこと。

<sup>11</sup> 訳者注：「ムズダリファ」とは、ヒジュラ暦 12 月 9 日の夜を過ごすことになっているマッカ近郊の場所。

タワーフ・アル＝イファーダはイードの日に行うのがスンナですが、アイヤーム・アッ＝タシュリーク、更にはズー・アル＝ヒッジャ月の最終日まで遅らせることも可能です。但し徒歩でも担がれてもタワーフが不可能な位の病気や、産後の出血などの正当な理由でタワーフ・アル＝イファーダをズー・アル＝ヒッジャ月以降にまで遅らせることは許されています。

● **ムズダリファで逗留する羽目になってしまった場合の法的見解：**

アラファからムズダリファに向かう際、混雑などの原因でイシャー（夜の礼拝）の時間内にムズダリファ到着が叶いそうにない場合は、到着前の道中で礼拝します。また何らかの理由でファジュルの時間に入った後、あるいは太陽が昇った後にムズダリファに到着した者は、そこに少しの間滞在した後、引き続きミナーに向かって移動します。このような者に関しては罪もなく、また贖罪も課されることもなく、そのハッジも有効なものと思なされます。

● ジャムラートの投石で複数の小石を一度に投げた場合、**1個の小石を投げたとしか見なされません。**ゆえにそのような者はそれを考慮し、残りの投石を完遂する必要があります。また投石する場所というのは小石を入れる穴のことであり、目印としてそこに建てられている壁のことではありません<sup>13</sup>。

● **日没以降に投石することに関する法的見解：**

巡礼者はアイヤーム・アッ＝タシュリークにおいて、正午を過ぎてから昼間の内に投石を済ませることが最善です。しかしもし混雑を恐れる場合は、日没以降に投げることも可能です。というのも預言者（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）は投石開始の時刻は定めましたが、終了時刻は明示しなかったからです。

イブン・アッバース（彼らにアッラーのご満悦あれ）によれば、ある者が預言者（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）にこう質問しました：「日没以降に投石してしまったのですが。」（預言者は）言いました：「問題はない。」また別の者はこう質問しました：「犠牲を屠る前に剃髪してしまったのですが。」すると（預言者は）言いました：「問題はない。」（アル＝ブハーリーとムスリムの伝承<sup>14</sup>）

● **月経中の女性のタワーフ：**

---

<sup>12</sup> 訳者注：「イファーダ」というアラビア語には「押し寄せる」という意味がありますが、これは巡礼者がミナーからマッカへと、このタワーフのために一斉に押し寄せて来ることにその名称の由来があると言われます。

<sup>13</sup> 訳者注：ゆえに壁に小石を当てなくても、穴に直接小石を投げて落とせば有効となります。

<sup>14</sup> サヒーフ・アル＝ブハーリー（1723）、サヒーフ・ムスリム（1306）。文章はアル＝ブハーリーのもの。

タワーフ・アル＝イファードの前に月経、あるいは産後の出血を見た者は、身体が清浄な状態になるまでタワーフをしません。そしてグスル<sup>15</sup>をして清浄な状態になれる時が来るまでマッカに滞在し、それからタワーフします。しかしもし彼女の同行者がその時期まで待っていることが出来なかったり、彼女がそれまでマッカに滞在することが出来なかったりする場合には、生理用品などを装着してタワーフします。というのも彼女はそうする必要に迫られているのであり、アッラーは人が抱えきれないような負担を課されることはないからです。そしてそのような者のハッジは、-アッラーのお許しと共に-正しく有効なものとなることでしょう。

#### ● 投石における代理に関する法的見解：

そうする能力のない老若男女の弱者のために投石の代理を依頼することは、合法です。そのような場合、代理人は各ジャマラートにおいてまず自分の分の投石を済ませ、それから依頼人のための投石をします。

- 女性がウムラのためのイフラム<sup>16</sup>に入り、タワーフをする前に月経を見た場合、ズー・アル＝ヒッジャ月の9日前に月経があがったらグスルをしてウムラを完遂します。そしてハッジのイフラムに入り、アラファへと向かいます。しかしもしその日までに月経が終わらなかったら、「ウムラとハッジのためにあなたの御許に馳せ参じます」と唱えてウムラにハッジを併合してしまいます。こうすることで彼女はキラーン（ハッジとウムラを同時進行する巡礼形式）に入り、人々と共にアラファの地に立ちます。そして月経が終了したらグスルをし、タワーフをするのです。
- イフラード（ハッジのみを行う巡礼形式）、あるいはキラーン（ハッジとウムラを同時進行する巡礼形式）をする者は、マッカ入りしてタワーフとサアイを終えたら、巡礼形式をタマツトゥ（ウムラを終えてからハッジに移行する巡礼形式）へと変更すべく、行った行をウムラと変換することがスナナです。タワーフ・アル＝イファードを行うまでは、巡礼形式をタマツトゥへと変換することが出来ます。一方イフラードをする者がキラーンへと巡礼形式を変更したり、キラーンをする者がイフラードへと変更したりはしません。飽くまでスナナは、イフラードかキラーンをする者が巡礼形式をタマツトゥへと変更することです。但しキラーンをする者が犠牲を連行している場合、そのままキラーンを継続します。
- ハッジであれウムラであれ、巡礼者は嘘やギーバ<sup>17</sup>、口論などから口を慎み、悪い品格を回避するにしなければなりません。またよい同行者を選び、合法かつよき手段で得た財でもって巡礼します。

15 訳者注：心身の清浄化を意図した全身の洗浄。

16 訳者注：詳しくは「③イフラム」の項を参照のこと。

17 訳者注：「ギーバ」とはその内容の真偽に関わらず、その本人が言及されることを厭うようなことをその陰で話すことを意味します。

● **カアバ神殿の中に入ることに關しての法的見解：**

カアバ神殿の中に入る機会があればそれはよいことですが、本来それは義務でもスンナでもありません。そのような機会を得た者は中でサラ（礼拝）をし、タクビール<sup>18</sup>し、ドゥアー（祈願）します。またカアバ神殿のドアから入った際にはそのまま真っ直ぐ進み、突き当りの壁と自分との間に約**3 ズィラーア**<sup>19</sup>ほどの間隔を空け、ドアを背にしてサラします。

● **ハッジの中には、特にドゥアー（祈願）すべき6つのポイントがあります：**

以下に挙げる**6**つの地点が、預言者（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）から確実に伝えられているドゥアーに専念すべき場所です：サアイにおける①サファーと②マルワの丘、③アラファ、④ムズダリファ、⑤最初のジャムラの投石後、⑥**2**番目のジャムラの投石後。

● **ハッジの巡礼者が一斉に移動するポイントは、3箇所あります：**①イードの日の夜、アラファからムズダリファまでの間と、②ムズダリファからミナーまでの間、そしてタワーフ・アル＝イファーダのために③ミナーからマッカへと移動する際です。

● **聖なる儀式の場における過ごし方：**

**1**—ミナーとムズダリファとアラファはハッジの聖なる儀式の場であり、誰も私有することは出来ません。

ミナーにおいて、正当な理由もなくアイヤーム・アッ＝タシュリークの**2**晩あるいは**3**晩の滞在を放棄した者のハッジは有効ですが、罪を犯したことになります。ミナー内に滞在する場所を見出すことが出来ない者は、ミナーの外でも構わないので、ミナーの境界線付近にあるテントから最も近い場所に腰を据えます。そのような場合ミナーの外に滞しても問題はなく、贖罪も義務付けられません。尚ミナー内の歩道や路上で夜を過ごしたりして自らを害し、他人に迷惑をかけたりにしてはいけません。

**2**—ミナーとムズダリファとアラファはモスクのような場所であり、誰もそこにおいて家を建てて賃貸したり、あるいはその土地を取得して賃貸したりするようなことをしてはなりません。もしそのような状況に遭遇した場合でも賃貸料金など払う義務はなく、罪はその場所を勝手に私有しようとした者にあります。またイマームは巡礼者の快適な滞在と福利の実現のため、これらの聖地における諸々の都合を取り計らう義務があります。

<sup>18</sup> 訳者注：アッラーこそが最も偉大であり、それ以外のものは全て些少な存在であることを唱念するための言葉。「アッラーフ・アクバル」という言葉に代表されます。

<sup>19</sup> 訳者注：1 ズィラーアは約**50cm**です。

アブドッラフマーン・ブン・ムアーズ（彼にアッラーのご満悦あれ）によれば、預言者（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）の教友のある者はこう言いました：「預言者（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）はミナーで説教をし、人々を各々の場所に配置しました。そして（預言者は）は、“ムハージルはここに宿営させよ”と行ってキブラの右側を示し、また“アンサールはこちらに宿営させよ”<sup>20</sup>と行ってキブラの左側を示しました。（それから預言者はこう言いました）“そして人々を彼らの回りに宿営させよ。”」（アブー・ダーウードとアン＝ナサーイーの伝承<sup>21</sup>）

### ● 預言者（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）のハッジの形：

ジャービル・ブン・アブドッラー（彼らにアッラーのご満悦あれ）は言いました：「アッラーの使徒（彼にアッラーからの平安と祝福あれ）は（マディーナに移ってから）**9**年間、ハッジをせずに過ごしました。そして**10**年目になってアッラーの使徒（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）がハッジの巡礼に出発するという通達がなされ、彼に従い、彼と同じように（ハッジを）行うことを望む多くの者がマディーナに集結しました。こうして私たちは彼と共にマディーナを出発し、ズー・アル＝フライファ<sup>22</sup>に到着しました。そこでアスマウ・ビント・ウマイスがアブー・バクルの息子であるムハンマドを出産しましたが、彼女はその件についていかにすべきか訊ねるべく、アッラーの使徒（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）に使いを送りました。（それに関して預言者は）言いました：“グスル<sup>23</sup>をし、布類でもって（出血が漏れぬよう）抑えるのだ。そしてイフラームに入るがよい”。それからアッラーの使徒（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）はモスクでサラ（礼拝）をし、アル＝カスワー<sup>24</sup>に乗りました。そして彼のラクダが砂漠で立ち止まった時、私は彼の前後左右が乗り物用の家畜に乗って、あるいは徒歩で歩む巡礼者で見渡す限り埋め尽くされているのを眺めました。クルアーンの啓示が下り、そしてその解釈を心得ているアッラーの使徒（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）は私たちの中心におり、そして私たちは彼の成すこと全てを模倣しました。そして彼は、タウヒードの言葉<sup>25</sup>を唱えました：“アッラーよ、あなたの御許に馳せ参じました。あなたの御許に馳せ参じました。あなたの御許に馳せ参じました、あなたに並ぶものはありません。あなたの御許に馳せ参じました。称賛と恩恵と主権は、並ぶものなきあなたにこそ属します”それで人々も同様に唱えましたが、アッラーの使徒（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）はそれに関して何の異議も

<sup>20</sup> 訳者注：「ムハージル」はマッカからマディーナへと宗教迫害を逃れて移住した信仰者で、「アンサール」は彼らをマディーナで迎え入れ、財や住居などの物質的側面と精神的側面から援助した信仰者たちのことです。

<sup>21</sup> 真正な伝承。スナン・アブー・ダーウード（1951）、スナン・アン＝ナサーイー（2996）。文章はアブー・ダーウードのもの。

<sup>22</sup> 訳者注：詳しくは「②ミーカート」の項を参照のこと。

<sup>23</sup> 訳者注：心身の清浄化を意図した全身の洗浄。

<sup>24</sup> 訳者注：「カスワー」は、預言者（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）のラクダの名前です。彼がマッカからマディーナへと宗教迫害を逃れて移住した時に乗っていたのが、このラクダであると言われています。

<sup>25</sup> 訳者注：つまり「タルビヤ」のことです。詳しくは「③イフラーム」の項を参照のこと。

唱えませんでした。こうしてアッラーの使徒（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）はタルビヤを常に唱え続けたのです。」

（続けて）ジャービル（彼にアッラーのご満悦あれ）は言いました：「私たちは皆ハッジに臨んだのであり、（ハッジの時期に）ウムラ（が行えることなど）は知りませんでした<sup>26</sup>。私たちは彼と共にカアバ神殿に赴き、（黒石の埋め込まれている）柱に触れました。そして（タワーフの最初の）3周を早足で、（残りの）4周を歩いて回りました。それからイブラーヒームの立ち所<sup>27</sup>へと赴き、- イブラーヒームの立ち所を、サラー（礼拝）の場とせよ。、（クルアーン 2：125）と唱え、それをカアバ神殿と自分の間に挟んだ形で立ちました。」

（伝承者の1人、ジャアファルはここで言いました：）「私の父 - 彼がそれを預言者（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）から伝えて言ったことなのかどうかは知りませんが - は、こう言いました<sup>28</sup>：（彼は、イブラーヒームの立ち所での2ラクアの礼拝において）： - 言え、「不信仰者たちよ。」、（クルアーン 109）と - 言え、かれはアッラー、唯一なるお方。、（クルアーン 112）を読みました。”

（ジャービルは続けて言いました：）「それから（預言者は黒石の）柱に戻ると黒石に触れ、（モスクの扉から）出てサファーへ向かいました。そしてサファーに近づくと、- 実にサファーとマルワは、アッラーのみしるしの1つである。ゆえにカアバ神殿へのハッジに詣でたり、ウムラを行ったりする者は、その周囲をタワーフしても支障はない。そして自ら進んで（義務ではないイバーダや善行を）行う者は、よきものを得よう。実にアッラーは（どのような些細なことであっても）よくお報いになられ、全てをご存知のお方なのである。、（クルアーン 2：158）と唱え、「アッラーが始められたことにおいて開始します<sup>29</sup>」と言い、サファーの丘から行を開始しました。そしてサファーの丘に昇るとカアバ神殿の方に向かい、タハリール<sup>30</sup>とタクビール<sup>31</sup>を唱えました。そしてこう言いました：「ラー・イラーハ・イッラッラーフ・ワハダフ・ラー・シャリーカ・ラフ、ラフ＝ル・ムルク、ワ・ラフ＝ル・ハムド、ワ・フワ・アラー・クツリ・シャイイン・カディール。ラー・イラーハ・イッラッラーフ・ワハダフ、アンジャザ・ワアダフ、ワ・ナサラ・アブダフ、ワ・ハザマ・アル＝アハザーバ・ワハダフ（いかなる共同者もない、唯一のアッラーの他に真に

<sup>26</sup> 訳者注：イスラーム以前の習慣では、ハッジの時期にはウムラは出来ないものとされていたためです。

<sup>27</sup> 訳者注：イブラーヒームがアッラーの命に従ってカアバ神殿を建設する際、その足場にしたと言われる台のこと。カアバ神殿からみて東側の、程近い場所にあります。

<sup>28</sup> 訳者注：このハディースは、預言者（彼にアッラーからの平安と祝福あれ）と共にハッジを行った教友ジャービルが第2伝承者であるムハンマドに、そしてムハンマドがその息子のジャアファルに伝える、という形で伝承されています。この言葉はジャアファルのもので、彼は彼の父ムハンマドが伝承の中で言及したクルアーンのこれらの章の朗誦についての話がジャービル自身のものであったのか、あるいはジャービルが預言者から伝えたものなのであったか確信がもてないと言っているのです（アン＝ナワウィー著サヒーフ・ムスリム解釈より）。

<sup>29</sup> 訳者注：クルアーンの句で「サファー」が「マルワ」より先に言及されている通り、「サファー」の丘からサアイの業を開始します、という意味であると言われます。

<sup>30</sup> 訳者注：アッラーこそが唯一の主であり、真に崇拝すべき対象であることを唱念するための言葉。「ラー・イラーハ・イッラッラー」という言葉に代表されます。

<sup>31</sup> 訳者注：アッラーこそが最も偉大であり、それ以外のものは全て些少な存在であることを唱念するための言葉。「アッラーフ・アクバル」という言葉に代表されます。



崇拜すべきものはなし。そしてかれにこそ主権と全ての賛美は属し、かれこそは全能のお方である。唯一のアッラーの他に真に崇拜すべきものはなし。かれはお約束をご遂行され、そのしもべをお助けになり、そしてかれ御 1 人で不信仰の輩を壊滅させられた) 32”それからドゥアー（祈願）に勤しみ、このようなことを 3 回繰り返しました。そしてマルワの丘へと向けてそこを降り、その両足が谷底に差し掛かったところで駆けました。そして上りに差し掛かると歩き出し、こうしてマルワの丘に到達しました。マルワの丘ではサファーの丘でしたのと同じことを行い、サイイの最後の周はマルワの丘で迎えました。そしてこう言いました：“もし私が過ぎ去ってしまったことを取り戻せるのなら、（私はマディーナから巡礼のための）犠牲を率いて来ず、そしてこれ（先に行った行のこと）をウムラとしたのだが。ゆえにあなた方の内で犠牲を率いてこなかった者は、今行った行をウムラとし、イフラームを解くのだ。”するとスラーカ・ブン・マーリク・ブン・ジュアシムが立ち上がり、こう言いました：“アッラーの使徒よ、この命令は今年のみなのですか、それとも今年以後ずっとなのですか？”アッラーの使徒（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）は両手の指を交互に組むと、2 回“ウムラはハッジの中に入れられたのだ”と言い、そしてこう言いました：“（この命令はこれ以降も）ずっとである。ずっとである”。

そこでアリーが預言者（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）のための犠牲（ラクダ）を引き連れて、イエメンからやって来ました。彼は（彼の妻）ファーティマ（彼女にアッラーのご満悦あれ）がイフラームを解き、染物の衣服をまとい、眼にはコフル<sup>33</sup>をつけていたので、それを咎めました。（ファーティマは彼に）言いました：“父（つまり預言者）がこうするよう命じられたのです。”

（ジャービルは引き続き）言いました：“アリーはイラクで、（この時のことについて）こう言ったものです：“私はファーティマが行ったことに関し、いきり立ちながらアッラーの使徒（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）のもとに赴き、彼女が言っていたことについて彼に訊ねました。そして自分が彼女の行いを咎めたことも伝えました。すると（預言者は）言いました：“（彼女は）真実を語った。真実を語った。あなたはハッジをしようと決心した時、何と言ったのか？”私は言いました：“アッラーよ、私はあなたの使徒が行ったようにイフラームに入ります、と言いました”（預言者は）言いました：“私には犠牲があるのだ。（それでイフラームを解かなかったのであり、）それゆえあなたもイフラームを解いてはならない””

（ジャービルは）言いました：“アリーがイエメンから率いて来た犠牲と、アッラーの使徒（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）が率いて来た犠牲の総数は 100 頭に達しました。”

（ジャービルは引き続き）言いました：“そして預言者（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）と犠牲を率いていた者を除いて、人々は皆イフラームを解き、頭髪を切りました。そ

32 サヒーフ・アル＝ブハーリー（4114）、サヒーフ・ムスリム（1218）。文章はムスリムのもの。

33 訳者注：眼病を予防したりする目的で目の周りに付ける黒い粉のこと。硫化アンチモンを指します。

してタルウィヤの日<sup>34</sup> - ズー・アル＝ヒッジャ月の 8 日 - に、彼らはミナーへと向かいました。そしてハッジのイフラームに入り、アッラーの使徒（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）はラクダに乗って（ミナーへと赴き）、そこでズフルとアスルとマグリブとイシャーとファジュールの礼拝をしました。そして（ファジュール後）太陽が昇るまで少し待つと、ナミラ<sup>35</sup>に（家畜の）毛製のテントを張るよう命じました。アッラーの使徒（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）は歩み出しましたが、クライシュ族の者たちはてっきり彼がイスラーム以前の無明時代にクライシュ族がそうしていたように、アル＝マシュアル・アル＝ハラーム（ムズダリファ）に留まるものだと思って疑いませんでした。しかしアッラーの使徒（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）はそこを越えて、アラファに到達しました<sup>36</sup>。ナミラには既に彼のためのテントが張られていました。彼は太陽が傾き始めるまでそこに滞在すると、カスワーウに鞍をつけるよう命じ、（ウラナ）谷の中央まで歩み出て人々に説教しました。（預言者は、説教においてこう）言いました：

“あなた方の生命も財産も、この国におけるこの日、この月の神聖さと同様に神聖なものなのだ。（イスラーム以前の）無明時代の諸事は、全て私の足下で破棄される。無名時代の血の復讐もまた、破棄されるのだ。血の復讐の廃止が適用される最初の例は、バヌー・サアド族に育てられフザイル族に殺されたラビーア・ブン・アル＝ハーリスの息子の件である。また無明時代のリバー（不法商行為）も破棄される。リバーの廃止が適用される最初の例は、アル＝アッパース・ブン・アブド・アル＝ムッタリブの利子の件である。それは全て放棄されるのだ。

また女性において、アッラー（の懲罰やお怒りの原因となるような物事）から身を慎むのだ。あなた方はアッラーの保障の下に彼女らを娶ったのあり、またアッラーの御言葉において彼女らの肉体を合法的なものとしたのであるから。あなた方は妻に対し、彼女らがあなた方の住まいにあなた方が望まない者を勝手に入れさせない権利を有する<sup>37</sup>。もし彼女らがそのような事をしたならば、あなた方は彼女らに体罰を施しても良いが、度を過ぎないようにせよ。また彼女らはあなた方に対し、食事と衣服を適切な形で与えられる権利を有する。

私はあなた方に、私の（死）後もそれを固守している限りはあなた方が迷い去ることのないものを残した。それこそはアッラーの書（クルアーン）である。あなた方は（審判の日）私について尋ねられるが、一体あなた方は（その時）何と言うのか？”

<sup>34</sup> 訳者注：「タルウィヤ」とは元来、水の供給を意味します。というのもヒジュラ暦 8 日に赴くことになっているミナーには本来水がなく、それゆえにこの日は水をミナーに運ぶことになっていたからです。

<sup>35</sup> 訳者注：ミナーから見てアラファの手前に位置する場所の名で、アラファの中には入りません。

<sup>36</sup> 訳者注：イスラーム以前の無明時代においてハッジの際、クライシュ族は「我々は聖域の民であるから、そこからは出ない」と奢り高ぶり、聖域外であるアラファまで行かずに聖域内であるムズダリファに逗留するという慣わしを固持していました。預言者（彼にアッラーからの平安と祝福あれ）はそんな彼らの期待を裏切り、クライシュ族以外の他のアラブ部族がそうしていたように、ムズダリファを後にして聖域外であるアラファに向かったのです。

<sup>37</sup> 訳者注：原文では「妻があなた方の厭う者を褥に入れさせない権利」とありますが、サヒーフ・ムスリム解釈者の 1 人であるアン＝ナウィーは上記のように解釈しています。

(聴衆は) 言いました：“「あなたは確かに、あなたの主からのメッセージを伝えられました。また(使徒としての役割を)果たされました。またあなたの共同体に(誠実な)忠告をされました」と証言します。”」

すると預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は人差し指を空に向けて指し、それから聴衆に向けて、“アッラーよ、証人たれ。アッラーよ、証人たれ”と**3**回繰り返して言いました。

そしてアザーン(礼拝時間に入ったことを告げる呼びかけ)が唱えられ、次いでイカーマ(礼拝開始の合図)が行われると、(預言者は)ズフルの礼拝を率いました。それから(また)イカーマが行われ、(今度は)アスルの礼拝を率いましたが、その**2**つの礼拝の間には何の礼拝もしませんでした。それからアッラーの使徒(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は(アラファの)立ち所へと赴き、彼の雌ラクダ「カスワーウ」を(ラフマ山の麓の)岩石群脇にとめました。そして歩道を面前にし、キブラの方向を向いて日没まで(祈願や念唱をしながら)立ち続けました。(日没直後の)黄色い光が少し消えて太陽が完全に沈んだ頃、彼はウサーマを後ろに同乗させてそこを出発しましたが、その際カスワーウの頭が(のけぞって)足をかける部分に当たるほどに手綱を強く引きました。そして右手で示しながら、こう言いました：“人々よ、静粛に。静粛に。”また砂丘の登り道にさしかかる度、ラクダがそこを登り切るまで(手綱を)幾分緩ませました。

こうしてムズダリファに到着し、そこで**1**度のアザーンと**2**度のイカーマでもってマグリブとイシャーの礼拝をしましたが、その(2つの礼拝の間)礼拝はしませんでした。それからアッラーの使徒(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)はファジュールまで横になると、**1**度のアザーンとイカーマでもってファジュールの礼拝を行い、それからカスワーウに乗ってアル＝マシュアル・アル＝ハラーム<sup>38</sup>に向かいました。そして空が非常に明るくなるまで、キブラに向かってドゥアー(祈願)し、タクビール<sup>39</sup>し、タハリール<sup>40</sup>し、アッラーの唯一性を確認し続けました。それから太陽が昇る前にそこを出発しましたが、その際アッラーの使徒(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)はアル＝ファドウル・ブン・アッバースを自分の後ろに同乗させました。彼は髪が美しく、肌の白い美男子でした。そして出発した後には婦人たちを乗せたラクダの**1**群の脇を通りかかりましたが、その時アル＝ファドウルは彼女たちを眺め出しました。それでアッラーの使徒(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は(彼が女性を見つめ続けないよう)手でアル＝ファドウルの顔を覆いましたが、彼は顔を逆方向から出してまた眺め出しました。それでアッラーの使徒(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は逆方向から手を出してアル＝ファドウルの顔を覆いましたが、彼はまた別方向から顔を出して眺め出すのでした。そうする内にムハッスィルの谷にさしかか

<sup>38</sup> 訳者注：本来ムズダリファ内のクザフという小山があったところですが、現在はそれはなくなり、モスクが建設されました。

<sup>39</sup> 訳者注：アッラーこそが最も偉大であり、それ以外のものは全て些少な存在であることを唱念するための言葉。「アッラーフ・アクバル」という言葉に代表されます。

<sup>40</sup> 訳者注：アッラーこそが唯一の主であり、真に崇拝すべき対象であることを唱念するための言葉。「ラー・イラーハ・イッラッラー」という言葉に代表されます。

り、(預言者は)歩みを少々速めました。そして大ジャムラ(アル=アカバのジャムラ)へと続く真ん中の道を取り、1本の木の脇にあるジャムラに到着しました。彼はそこで7つの小石を投げましたが、谷の真ん中から1つずつ指でつまんで投げ、その一投ごとに「アッラーフ・アクバル(アッラーは偉大なり)」と言いました。

それから犠牲を屠る場所へ赴き、自らの手で(100頭いた内の)63頭のラクダを屠りました。そして残りはアリーに屠らせ、彼と犠牲を共有させました。それから屠ったラクダの肉片を鍋で調理するよう命じ、アリーと共にその肉を食し、スープを飲みました。

その後アッラーの使徒(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)はラクダに乗ると、カアバ神殿へと向かい(タワーフ・アル=イファダをし)ました。そしてマッカでズフルの礼拝を行った後、ザムザムの水の管理にあっていたアブド・アル=ムッタリブ家の者たちのもとに赴き、こう言いました:「アブド・アル=ムッタリブ家の者たちよ、水を汲むのだ。もし人々が(私のすることに従おうとして挙ってやって来て)あなた方のこの水汲み作業を奪ってしまう恐れがなければ、私はあなた方と共に水汲みをしたところなのだが。」それで彼らはバケツで水を汲み、彼はそれを飲みました。」(ムスリムの伝承<sup>41</sup>)

### ● ハッジやウムラに関わらず、旅路から帰宅した際に唱えること:

アブドラー・ブン・ウマル(彼らにアッラーのご満悦あれ)によれば、アッラーの使徒(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は軍の派遣や遠征、あるいはハッジやウムラから帰って来ると、丘や丘陵地に昇って3回タクビールし、こう言いました:「唯一のアッラー以外に真に崇拝すべきものはなく、かれに並ぶ何ものもありません。王権はかれに属し、讚美もかれに属します。かれは全てにおいて全能です。私たち主の御許へと帰り、悔悟し、崇拝し、サジダ(平伏礼)し、そしてかれを称えます。アッラーは御自身のお約束をご履行し、そのしもべを勝利させ、部族連合をかれのみのお力で敗走させられました。」(アル=ブハーリーとムスリムの伝承<sup>42</sup>)

### ● ハッジにおける根幹的行為<sup>43</sup>:

①イフラーム、②アラファでの滞在、③タワーフ・アル=イファダ、④サアイ。

### ● ハッジにおける義務行為:

本人にとって適切なミーカートからイフラームに入ること。

給水や家畜の管理などの正当な理由がない者を除き、アイヤーム・アッ=タシュリークの最初の2日間の晩をミナーで過ごすこと。

<sup>41</sup> サヒーフ・ムスリム(1218)。

<sup>42</sup> サヒーフ・アル=ブハーリー(1797)、サヒーフ・ムスリム(1344)。文章はムスリムのもの。

<sup>43</sup> 記者注:それを遂行しなければ、ハッジがそもそも成立しない根幹的義務行為のことです。

イードの日の晩をムズダリファで過ごすこと。あるいは弱者などの場合は、夜の半分以上をそこで過ごすこと。

ジャムラートの投石。

剃髪、あるいは頭髪を切ること。

巡礼を終えてマッカを去る際に、マッカ住民でない者がタワーフ・アル＝ワダーウ（別れのタワーフ）を行うこと。

- イフラームをしなければ、巡礼の儀は成立しません。またハッジであれウムラであれ根幹的行為を1つでもやり損ねれば、巡礼の儀の成立はありません。
- 義務行為をどれか1つでも故意に、かつその規定を知りつつ放棄した者は罪を犯したとみなされます。そのような者には贖罪としての犠牲は課されず<sup>44</sup>、巡礼の儀自体は正しいのですが、不完全であると見なされます。また言動的なものであれ行為的なものであれ、巡礼におけるスンナ - 根幹的行為と義務的行為以外のもの - の放棄ややり損ねに関してはその罪を問われることもなく、何らかのペナルティが課されることもありません。
- 巡礼の儀のやり損ねと妨害に関する法的見解：

アラファでの滞在を逃した者は、ハッジをやり損ねたこととなります。そのような場合はその巡礼をウムラとしてイフラームの解除をし、犠牲を捧げ、もしそのハッジが任意ではなく義務のものであれば後にそのやり直しを求められます。但し、前もって巡礼に条件付けていた場合<sup>45</sup>はその限りではありません。

また敵によってカアバ神殿の入場を阻止された者は、犠牲を捧げ、剃髪か頭髪の切除を行ってからイフラームを解除します。そしてアラファ滞在を阻まれた場合は、ウムラをもってイフラームの解除とします。

病気や財産の枯渇などで巡礼の継続が不可能になってしまった場合は、もし前もって条件付けていたのなら、何のペナルティもなくイフラームを解除することが出来ます。一方イフラームを条件付けていなかった場合は、何らかの犠牲を屠り、剃髪か頭髪の切除をした後イフラームを解きます。また骨折や病気、身体が不自由になるなどの理由で巡礼の遂行が不可能になった場合はイフラームを解除し、もしそのハッジが任意のものではなく義務のものであったのなら、その後そのハッジをやり直す義務があります。

---

<sup>44</sup> 訳者注：4 大法学派の一致した見解では、意図的であったかどうかを問わず、義務行為を1つでもやり損ねた場合には贖罪としての犠牲が課されます。

<sup>45</sup> 訳者注：ムフリム（イフラームに入る者）は病気や（敵による妨害などの）恐怖の状態にある場合、イフラームの際に巡礼の形式を唱える時、こう言うことがスンナです：「もし阻むものが私（の巡礼の遂行）を阻んだら、私の（イフラームを解く）場所はあなたが私を阻まれた所です」こうすれば、もし何かによって巡礼を妨害されたり病状が悪化したりしても、イフラームを解く際に犠牲を捧げなくても済むのです。

# 預言者モスクの訪問

[ 日本語 ]

## زيارة المسجد النبوي

[ اللغة اليابانية ]

ムハンマド・ブン・イブラーヒーム・アツ＝トゥワイジリー

محمد بن إبراهيم التويجري

翻訳者: サイード佐藤

ترجمة: سعيد ساتو

校閲者: ファーティマ佐藤

مراجعة: فاطمة ساتو

海外ダアワ啓発援助オフィス組織 (リヤド市ラブワ地区)

المكتب التعاوني للدعوة وتوعية الجاليات بالربوة بمدينة الرياض

1429 – 2008

islamhouse.com

## ⑩預言者モスクの訪問

### ● 3つのモスクの特質：

3つのモスクとは：①マッカのハラーム・モスク、②マディーナの預言者モスク、③エルサレムのアクサー・モスクのことです。

1-ハラーム・モスクとは：イブラーヒーム（アブラハム：彼に平安あれ）とその息子イスマーイール（イシュマエル：彼に平安あれ）の建設したモスクで、ムスリムのキブラ（礼拝の際に向かう方向）であり、ハッジの訪問先でもあります。またそれは史上最初に人々の崇拝行為のために建設された館であり、アッラーはそれを祝福に溢れ、全世界のための導きとされました。

預言者モスクはその名の通り、預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）とその教友たち（彼らにアッラーのご満悦あれ）がタクワー<sup>1</sup>の念を礎として建設したモスクです。

アクサー・モスクはヤアクーブ（ヤコブ：彼に平安あれ）が建設したモスクで、ムスリムの最初のキブラでした。

2-これら3つのモスクでのサラ（礼拝）には、幾倍もの報奨があります。またそれ以外の諸々の特質ゆえにも、ムスリムはこれら3つのモスク以外の場所を目的地として旅立ちほしないのです。

● 預言者のものであるかそうでないかを問わず、誰かの墓の訪問を目的として旅立つことは禁じられています。

アブー・フライラ（彼にアッラーのご満悦あれ）によれば、預言者（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）は言いました：「ハラーム・モスク、預言者モスク、アクサー・モスクの3つのモスク以外の場所を目的として旅立つてはならない<sup>2</sup>。」（アル＝ブハーリーとムスリムの伝承<sup>3</sup>）

### ● 預言者モスクの訪問に関する法的見解：

<sup>1</sup> 訳者注：「タクワー」は「自らを守る」という動詞の名詞形。つまりアッラーを畏れ、またそのお怒りと懲罰につながるような行い - つまりかれが命じられたことに反したり、あるいは禁じられた事柄を犯したりすることなど - を避けることで、自らの身をアッラーのお怒りや懲罰から守ることを意味します。

<sup>2</sup> 訳者注：ある学者たちは、ここで意味しているのはこれら3つのモスク以外の場所を目的として旅行してはならないということではなく、これら3つのモスク以外のモスクを目的とした旅行が非合法なのだ、といったような解釈もしています。

<sup>3</sup> サヒーフ・アル＝ブハーリー（1189）、サヒーフ・ムスリム（1397）。文章はアル＝ブハーリーのもの。

預言者モスクの訪問はスンナ<sup>4</sup>です。預言者モスクに入ったら他のモスクですのと同様に、まず 2 ラクアのタヒヤト・アル＝マスジド<sup>5</sup>を行います。

それから預言者（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）のお墓に赴き、その前に立って「アッ＝サラーム・アライカ・アイユハンナビユ・ワ・ラフマトゥッラーヒ・ワ・バラカートゥフ（預言者よ、あなたにアッラーからの平安とご慈悲と祝福あれ）」と挨拶します。また正しいハディースによって伝えられる、墓を来訪した際の他のドゥアーを唱えても良いでしょう。それから右側に一歩進み、アブー・バクル（彼にアッラーのご満悦あれ）にも同様に挨拶します。そしてその後はまた右側に一歩進み出て、今度はウマル（彼にアッラーのご満悦あれ）に挨拶します。

アブー・フライラ（彼にアッラーのご満悦あれ）によれば、アッラーの使徒（彼にアッラーからの平安と祝福あれ）は言いました：「私に挨拶（サラーム）する者には、私がそれに返事すべく、アッラーが私の魂を私の体に戻して下さるであろう。」（アブー・ダーウードとアフマドの伝承<sup>6</sup>）

### ● 預言者モスクでサラ（礼拝）することの徳：

マディーナの預言者モスクでのサラは、それ以外のモスクでするサラの **1000** 倍の報奨があると言われていています（但しマッカのハラーム・モスクは除きます）。

**1**—イブン・ウマル（彼らにアッラーのご満悦あれ）によれば、預言者（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）は言いました：「私のこのモスクでするサラは、それ以外の他のモスクでする **1000** 回のサラよりも優れている。但しハラーム・モスクはその限りではないが。」（アル＝ブハーリーとムスリムの伝承<sup>7</sup>）

**2**—アブー・フライラ（彼にアッラーのご満悦あれ）によれば、預言者（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）は言いました：「（預言者モスクにおける）私の住まいと私のミンバル（説教壇）との間には、天国の樂園の **1** つがある。そして私のミンバルは、（天国にある）私の水辺<sup>8</sup>の上にあるのだ。」（アル＝ブハーリーとムスリムの伝承<sup>9</sup>）

---

4 訳者注：預言者ムハンマド（彼にアッラーの祝福と平安あれ）の示した手法や道のこと。ムスリムは可能な限り、彼のスンナを踏襲するべきであるとされています。

5 訳者注：モスクに入った時、腰を下ろす前に行う 2 ラクアのサラのこと。預言者（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）のスンナです。

6 良好な伝承。スナン・アブー・ダーウード（2041）、ムスナド・アフマド（10827）。

7 サヒーフ・アル＝ブハーリー（1190）、サヒーフ・ムスリム（1395）。文章はムスリムのもの。

8 訳者注：詳しくは「タウヒードとイーマーン」の章の「最後の日への信仰 - 8 預言者たちの水辺」の項を参照のこと。

9 サヒーフ・アル＝ブハーリー（1196）、サヒーフ・ムスリム（1391）。



- アル＝バキーウの墓地<sup>10</sup>とウフドの役の殉教者たちを訪れ、彼らに挨拶やドゥアー（祈願）をしたり、罪の赦しを乞うたりすることはスンナです。尚、墓場を訪れた時には次のように唱えます：

1ー「イーマーンの徒とイスラームの徒<sup>11</sup>からなる墓の住人たちよ、あなた方の上に平安あれ。アッラーが私たちの内の先人たちにも後人たちにも、ご慈悲を垂れて下さいますように。そして実に私たちはアッラーの思し召しと共に、やがてあなた方の所へと仲間入りする身の上なのです。」（ムスリムの伝承<sup>12</sup>）

2ーあるいはこう唱えます：「イーマーンの徒とイスラームの徒からなる墓の住人たちよ、あなた方の上に平安あれ。実に私たちはアッラーの思し召しとともに、やがてあなた方の所へ仲間入りする身の上なのです。私はアッラーに、私たちとあなた方の無事<sup>13</sup>を祈ります。」（ムスリムの伝承<sup>14</sup>）

- クバー・モスク<sup>15</sup>でサラールすることの徳：

家でウドゥー<sup>16</sup>してから、乗り物なり徒歩なりでクバー・モスクへと赴いて 2 ラクアのサラールをすることは、ウムラを 1 回分の報奨に匹敵します。尚それには土曜日が最もよいと言われています。

1ーサハル・ブン・ハニーフ（彼にアッラーのご満悦あれ）は言いました：「アッラーの使徒（彼にアッラーからの平安と祝福あれ）は言いました：「自宅で体を清め、それからクバー・モスクに赴いてサラールをする者には、ウムラ 1 回分の報奨があろう。」」（アン＝ナサーイーとイブン・マージャの伝承<sup>17</sup>）

2ーイブン・ウマル（彼らにアッラーのご満悦あれ）は言いました：「預言者（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）は毎週土曜日に、乗り物用の家畜かあるいは徒歩でクバー・モスクを訪れたものです。」（アル＝ブハーリーとムスリムの伝承<sup>18</sup>）

---

10 訳者注：預言者モスクの東側に位置し、数多くの教友が埋葬されている墓地です。

11 訳者注：詳しくは「タウヒードとイーマーン」の章の「イスラームとイーマーン」の項を参照のこと。

12 サヒーフ・ムスリム（974）。

13 訳者注：つまり墓の中での懲罰からの無事のことです。詳しくは「タウヒードとイーマーン」の章の「最後の日への信仰①」を参照のこと。

14 サヒーフ・ムスリム（975）。

15 訳者注：預言者（彼にアッラーからの平安と祝福あれ）がマディーナにヒジュラした際、現在のマディーナの中心地から約 6km の地点に建設したイスラーム史上最初のモスク。

16 訳者注：イスラームにおいて定められたある一定の形式における、心身の清浄化を意図した体の各部位の洗浄。

17 真正な伝承。スナン・アン＝ナサーイー（699）、スナン・イブン・マージャ（1412）。文章はイブン・マージャのもの。

18 サヒーフ・アル＝ブハーリー（1193）、サヒーフ・ムスリム（1399）。文章はアル＝ブハーリーのもの。

- マディーナの預言者モスク来訪はハッジやウムラの儀の一環というわけではなく、それなしでも巡礼は成立します。預言者（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）のモスクを訪れることは、いかなる時期においてもスンナなのです。